

I 導入部

おはようございます。2月の第四日曜日の礼拝です。今日も愛する皆さんと共に礼拝をささげることができますことを心から感謝致します。2025年も2月の最後の礼拝を迎えるました。2月は逃げていきますね。3月はあっという間に去ってしまいますので、毎日毎日を、毎週の礼拝を大切にしていきたいと思うのです。今日は、旧約聖書列王記下7章1節から11節を通して、「見つけた宝は山分けにしよう」という題でお話し致します。

II 本論部

一、最も弱い存在が神様に用いられることになる

サマリアの町はアラム軍の包囲により飢餓状態に追い込まれ、「ろばの頭一つが銀八十シェケル、鳩の糞四分の一カブが五シェケルで売られるようになった。」(列王記下 6:25)のです。人々は自分たちの子どもさえ煮炊きにして食べたのです。サマリアの置かれた深刻な状況は、神様に対するイスラエル自身の罪によってもたらされたものでした。しかし、イスラエルの王はその原因を預言者エリシャが、自分の務めを十分に果たさなかった責任だと責任転嫁しました。イスラエルの王は、このような悲惨な事態をもたらした神様の代弁者エリシャを殺して打開を図ろうとしたのです。7章1節を見ると、「エリシャは言った。「主の言葉を聞きなさい。主はこう言われる。『明日の今ごろ、サマリアの城門で上等の小麦粉一セアが一シェケル、大麦二セアが一シェケルで売られる。』」とあります。一セアは7リットルで当時の値段は100シェケル以上したようですが、それが1シェケル、百分の一になるというのです。エリシャは飢饉が終わると語りました。2節には、「王の介添えをしていた侍従は神の人に答えた。「主が天に窓を造られたとしても、そんなことはなかろう。」エリシャは言った。「あなたは自分の目でそれを見る。だが、それを食べることはない。」」とあり、これは侍従だけの言葉ではなく、王もサマリアの人々も信じることのできない内容でした。3節には、「城門の入り口に重い皮膚病を患う者が四人いて、互いに言い合った。「どうしてわたしたちは死ぬまでここに座っていられようか。」とあります。レビ記には、「重い皮膚病にかかっている患者は、衣服を裂き、髪をほどき、口ひげを覆い、「わたしは汚れた者です。汚れた者です」と呼ばわらねばならない。この症状があるかぎり、その人は汚れている。その人は独りで宿営の外に住まねばならない。」(レビ記 13:45-46)とあります。また民数記には、「イスラエルの人々に命じて、重い皮膚病にかかっている者、漏出のある者、死体に触れて汚れた者をことごとく宿営の外に出しなさい。」(民数記 5:2)とあります。律法によれば、重い皮膚病患者は町に入ることは許されず、門の外側にいて、4人の重い皮膚病患者は、サマリアの人々の余りものや捨てたもので生きることができていたのです。けれども、飢饉のためにサマリアの町の人々も食べることもできないのです。この4人は、サマリアの町の人々の必要が見たされてこそ、生きることができたのです。飢饉のために、サマリアの町の人々に食べる物がないとしたら、人が生き残る確率は限りなくゼロに近いのです。4節には、「町に入ろうと言ってみたところで、町は飢饉に見舞わ

れていて、わたしたちはそこで死ぬだけだし、ここに座っていても死ぬだけだ。そうならアラムの陣営に投降しよう。もし彼らが生かしてくれるなら、わたしたちは生き延びることができる。もしわざとを殺すなら、死ぬまでのことだ。」とあります。人が動く、行動する時というものは、現状をそのまま続けていても何も変わらないと知った時、悟った時なのでしょう。「町に入ろうと言ってみたところで、町は飢饉に見舞われていて、わたしたちはそこで死ぬだけだし、ここに座っていても死ぬだけだ。そうならアラムの陣営に投降しよう。」という行動に出るのでです。そして、このことが自分たちを、そしてサマリアの町の人々を救うきっかけになるのです。神様は人間的に見て、マイナスにしか思えない人を用いて、祝福をもたらされるのです。今までの事をただ続けていても、何も変わらないと知る、悟ることが、神様の道に向き合うきっかけになるのかも知れないので。もしかしたら、状況が、状態が何も変わらないことを続けているとしたら、今行動を起こす時なのかも知れません。ディボーションを通して、神様の導きを求めることが大切なのだと思うのです。

二、与えられたものを分かち合うことによって

5節には、「夕暮れに、彼らはアラムの陣営に行こうと立ち上がったが、アラムの陣営の外れまで来たところ、そこにはだれもいなかった。」とあります。「アラムの陣営に投降しよう。もし彼らが生かしてくれるなら、わたしたちは生き延びることができる。もしわざとを殺すなら、死ぬまでのことだ。」と意を決して、覚悟して、命をかけて陣営に来たら、誰もいなかったのです。それが現実でした。アラムの陣営に誰もいないのなら、何も苦しむことはなかったのです。命をつなぐための備えは、救いは現実のものとなっていました。アラムの陣営に誰もいなかったことの理由は、6節、7節に記されています。「主が戦車の音や軍馬の音や大軍の音をアラムの陣営に響き渡らせられたため、彼らは、「見よ、イスラエルの王が我々を攻めるためにヘト人の諸王やエジプトの諸王を買収したのだ」と言い合い、夕暮れに立って逃げ去った。彼らは天幕も馬もろばも捨て、陣営をそのままにして、命を惜しんで逃げ去った。」とあります。神様の直接的な介入でアラム軍は逃げて行つたのです。出エジプトしたイスラエルの民が、紅海を前にして、エジプトからのパロの軍隊が押し寄せて来て、絶体絶命の時、どうすることもできない時、神様はモーセに言わされました。「**主があなたたちのために戦われる。あなたたちは静かにしていなさい。**」と。サマリアにいる王も人々も飢饉のゆえにどうすることもできない、絶体絶命の時、神様が直接介入されたのです。「**主があなたたちのために戦われる。あなたたちは静かにしていなさい。**」

8節には、「重い皮膚病を患っている者たちは陣営の外れまで来て、一つの天幕に入り、飲み食いした後、銀、金、衣服を運び出して隠した。彼らはまた戻って来て他の天幕に入り、そこからも運び出して隠した。」とあります。食べ放題、取り放題の状況でしたので、4人は食べまくりました。天幕を次から次へと渡り歩き、食べて食べて食べ続けたのです。お腹が落ち着くと、銀や金、衣服も取り放題で持ち出しては隠し、持ち出しては隠しての連続でした。自分の好きなだけ食べられる、思う存分に銀や金、衣服を自分のものにできるというのは幸せなことでしょう。電気店に招待されて、「**お好きなものをお好きなだけ**

うぞ。」と言われたら、パソコン、テレビ、携帯電話、冷蔵庫、洗濯機・・・そうなるのでしょうか。4人は我を忘れて、食べ物を食べあさり、銀や金、衣服を持ち出しては隠したのです。使徒言行録10章11節から15節には、「天が開き、大きな布のような入れ物が、四隅でつるされて、地上に下りて来るのを見た。その中には、あらゆる獣、地を這うもの、空の鳥が入っていた。そして、「ペトロよ、身を起こし、屠って食べなさい」と言う声がした。しかし、ペトロは言った。「主よ、とんでもないことです。清くない物、汚れた物は何一つ食べたことがありません。」すると、また声が聞こえてきた。「神が清めた物を、清くないなどと、あなたは言ってはならない。」とあります。ユダヤ人は異邦人を「汚れた者」としていました。この4人の重い皮膚病患者は、「四隅でつるされて」「大きな布のような入れ物」の中にある汚れた生き物を象徴しているようです。異邦人の象徴でしょう。これは、イスラエルの回復に関する啓示なのです。神様の律法では、ユダヤ人が外国人（異邦人）の仲間に入ったり、訪問したるすることは禁じられていました。しかし、神様はペトロに、「神が清めた物を、清くないなどと、あなたは言ってはならない。」と示されました。初め、ペトロは正しく悟ることができませんでした。イスラエルの人々もそうだったでしょう。飢饉の中で、エリシャは明日には飢饉は終わり食料が有り余るようになると預言しました。しかし、それはどのような方法でなされるのかということは知らされていませんでした。おそらくエリシャも知らなかつたのでしょう。その方法とは、人間が全く予想もしなかつた方法でした。神様の御計画と導きはいつもそうなのかも知れません。神様の方法とは、いつも私たち人間の想定外、思いもよらない方法でなされるように思うのです。サマリアの飢饉からの回復も、神様ご自身の業であり、誰もが見向きもしない、最も小さく、弱い存在の4人の重い皮膚病患者を用いて行われたのです。イスラエルの回復も預言も思いがけない方法で、神が人となるという、あっと驚くような方法で実現されていくのです。イスラエルに、サマリアの人々に食料が与えられたのは、王やサマリアの人々が悔い改めたからでも、サマリアの人々が神様に求めたからでもありませんでした。ただ、ただ神様の主権と愛と恵みと憐れみのゆえでした。世界を見ると、日本を見ると悲惨な事柄ばかりが目につきます。どこにも希望がないように見えます。しかし、私たち人間の世界に希望が持てなくとも、希望が見えなくとも、神様には、イエス様には希望があるのです。神様に、イエス様に期待したいのです。イエス様は言わされました。「信じない者ではなく、信じる者になりなさい。」と。

三、ただ伝えることが恵みに祝福につながる

9節には、「彼らは互いに言い合った。「わたしたちはこのようなことをしてはならない。この日は良い知らせの日だ。わたしたちが黙って朝日が昇るまで待っているなら、罰を受けるだろう。さあ行って、王家の人々に知らせよう。」」とあります。宝を見つけたら、独り占めしたいというのが私たち人間の欲望でしょう。誰にも知らせずに、自分が全てをいただくというのは、発見した者の権利でもあるのでしょうか。4人の重い皮膚病患者たちは、サマリアの人々からは、汚れた者だと差別され、見下され、腐ったものを与えたり、いじわるする人もいたでしょう。差別され、辛い、悲しい、経験をしてきたことでしょう。サマリアの人々に対して恨みの思いもあったでしょう。いつか仕返しをしてやりた

いと思うのも当然です。ですから、アラム軍の陣営で、そこには誰もいなくて、食料は食べ放題、銀や金、衣服は取り放題の状況を自分たちだけのものにしても問題はなかったでしょう。自分たちはお腹を満たし、元気や気力が出てきて、サマリアの人々は未だに苦しんでいることに、「**ざまあ見ろ**」と何もせずにほおっておくこともできましたし、別に食料や銀や金、衣服が満たされていることを伝える必要も義務もなかったのです。しかし彼らは、「わたしたちはこのようなことをしてはならない。この日は良い知らせの日だ。わたしたちが黙って朝日が昇るまで待っているなら、罰を受けるだろう。さあ行って、王家の人々に知らせよう。」と考えたのです。今の祝福は、自分たちの努力でも頑張りでも何でもありません。ただ、神様が与えて下さったのです。神様からの一方的な恵みと憐れみだったのです。10節には、「彼らは行って町の門衛を呼び、こう伝えた。」「わたしたちはアラムの陣営に行って来ましたが、そこにはだれもいませんでした。そこには人の声もなく、ただ馬やろばがつながれたままで、天幕もそのままでした。」とあります。神様がして下さった出来事を伝えたのです。サマリアの人々にとっては、大きな祝福でした。11節には、「門衛たちは叫んで、この知らせを中の王家の人々に知らせた。」とあります。そして、サマリアの人々は命をつなぐことができたのです。「明日の今ごろ、サマリアの城門で上等の小麦粉一セアが一シェケル、大麦二セアが一シェケルで売られる。」というエリシャの預言が成就したのです。ひどい飢饉の中で、「明日の今ごろ、サマリアの城門で上等の小麦粉一セアが一シェケル、大麦二セアが一シェケルで売られる。」という内容は信じがたい事柄です。このようになるという結果だけが伝えられたのは、それが神様の言葉であるという以外に信じるべき何の根拠もないのです。「**もっと信じられるようなことを言ってくれば、信じます。**」と人は言うのかも知れません。しかし、神様の方法とは、神様のなさることは、神様のみ業は、私たち人間が自分の納得することを根拠に信じるということではないのです。イスラエルの王は、4人から伝えられた事を聞いても信じませんでした。アラム軍の策略だと思いました。どんな素晴らしい事でも信じない人はいるのです。イエス様の十字架と復活を通して与えられる救い、福音も、あまりにも素晴らしい事で、信じるだけで罪が赦される。永遠の命が与えられると聞いても信じられない人が多くいるのです。

福音を伝えるとは、伝道するとは、食べ物のありかを見つけた者が、他の人々にそのありかを、その場所を教えてあげるようなものです。私たちは、先にイエス様の十字架の死と復活、福音の内容を聞いて、信じて救いに導かれました。イエス様が罪人の私のために十字架にかかり、裁かれ、尊い血を流し、命をささげて下さった。死んで下さった。死んで墓に葬られましたが、三日目によみがえらされて、罪と死に勝利された。イエス様の十字架の死と復活によって、全ての罪が赦されたことを信じて救われ、義とされた。そして、死んでも生きる命、永遠の命、天国の恵みをいただいたのです。この救いは、私たちの努力や頑張りではなく、神様の一方的な愛と、恵みと憐れみによるものなのです。福音を、良い知らせを受けた者だけが、その特権に与ができるのです。特効薬を見つけた人はそれを秘密にすることなどできません。福音という魂の救い、死から救われるための特効薬を知っているのに、それを黙っていて自分のものだけにしていいはずがないのです。この4人の重い皮膚病患者のように、その恵みを伝えたいのです。

Ⅲ 結論部

私たちは、救い主イエス様の事や福音を伝えたいという思いは誰にでもあるのだと思います。でも伝えて信じない。受け入れないということを恐れことがあります。また、どのように伝えたらいいのか、わからないという方々も多くいると思います。その方法と秘訣は、今日の午後からのセミナー「**聖書とは**、**を通して魂を救いに導く方法**」でお伝えしたいと思います。ぜひ参加してみてください。損はありません。私はあるセミナーに出て、「**聖書とは**」に出会って変えられました。私は魂を救いに導くことのできない牧師でした。魂を救いに導く専門家だと言われる牧師なのに、魂を救いに導くことができませんでした。セミナーの講師は、「**福音を福音として相手にわかるように伝えれば、それを、つまり福音を否定する理由はない。**」とはっきり言われました。「この方法で魂を導くならば、**100%成功します。**」と言い切ったのです。その時私は、「うそだ～」と思いました。「**100%は言い過ぎ！**」と思った。講師はまた、「**読めばいいだけです**」と言ったのです。ですから、「**何もしないで魂を救えないままでいるなら、このやり方を学んで、読むだけでいいなら、やってみよう。だめならダメで、今と別に変らない。**」私は、この学びに、救いの方法に飛びつきました。学んで、必要な内容を書き込ん準備が完成したら、「**ピンポン**」とある青年が教会に訪ねて來たのです「**よし、この青年にやってみよう**」とやったら、彼は救われたのです。読んだら救われてしまった、というのが正直な感想でした。セミナーの講師は、「**福音を福音として相手にわかるように伝えれば、それを、つまり福音を否定する理由はない。**」と言われた。読んだ内容が福音を福音として伝えたのです。わたしは、今まで多くの人々に福音を伝えてきました。そして、伝えた**100%**の人々が救われてきたのです。うそではなかったと今では思っています。魂を救うのは、私たち人間ではありません。神様なのです。聖霊の働きなのです。私たちは、救いの内容、福音を、良い知らせを伝えるだけでいいのです。福音放送で有名であった羽鳥明先生は、自分の弟を初めて教会に連れて行きました。この弟は、東京大学工学部出で、共産党員で唯物論者でした。その弟さんを初めて教会に誘った日がイースター礼拝でした。羽鳥先生はメッセージが始まって、「**しまった**」と思ったそうです。イースター礼拝ですから、「**十字架と復活が語られ、復活が強調される。弟は絶対に信じない。当分、弟は教会に来ることはないな。**」と思ったそうです。しかし、そこで語られた十字架と復活、福音、良き知らせを聞いて、弟さんは救われ、神学校に行き牧師となられたのです。パウロは、福音を「**良き知らせ**」と呼びました。パウロは言います。「**もっとも、わたしが福音を告げ知らせても、それはわたしの誇りにはなりません。そうせずにいられないことだからです。福音を告げ知らせないなら、わたしは不幸なのです。**」4人の重い皮膚病患者たちは、良き知らせと伝えました。それだけなのです。後がどうこうとは考えていません。それでいいのです。私たちがイエス様を、福音を伝えても、その人が救われるか、救われないかは、私たちの責任ではありません。責任にしてはならないのです。私たちがすることは、イエス様の十字架と復活、福音を仕えるここまでなのです。私たちは驚く宝の山を、福音をすでに発見しているのですから、まだ知らない人々と山分けをしようではありませんか。この週もイエス様に委全ての重荷を委ねて、安心してイエス様と共に歩んでまいりましょう。